

偉大なる北溟の自然

(昭和三十九年寮歌)

司馬威彦君 作歌・作曲

序

偉大なる北溟の自然は
我が眼前に限りなく広がりて
野に満てる清冽の気は
雄々しくも気高き情懷もて
嶮路遙かに辿り来し
遊子が胸を今や満しぬ

一

颼々の北風は荒び
白銀の華大地覆えど
そはろかなる古より
汚れなき美の世界なれば
若人はひたぶるの
愁いを秘めて
異邦ゆ憶懷れ集いぬ

二

いよ増す静寂のなかに
永劫の影宿す原始の深森よ
先哲の行路を慕いて
思索胸に榆陵を歩めば
仰ぎみるエルムの梢に
萌え出ん若き情熱は

三

かりそめの宿にはあれど
忘れ得じ若き日の遍歴
彷徨えば夕陽の榆陵に
宵闇はかそけくも訪れ
睡みてし真心と友情に
篝火は赤く燃えたり

四

輝ける北国のたくみよ
されど優りて美しき自治の伝統よ
斗い苦悩み寮友と語れば
なごて疾く過ぎ行く二年の春
願わなん永久の榮えを
恵迪の寮故郷の上に

結

されど視よ我等が周囲を
邪悪なる権力は四方に荒び
我等が愛し誇らん自治の砦に
暴逆の誠は課されんとす
されば我が寮友よ腕むすびて
今ぞ正義の旗を高くかかげん